

芸術祭奨励賞
毎日映画コンクール教育文化映画賞
教育映画祭最高賞
キネマ旬報ベストテン第一位
イラン国際映画祭優秀作品賞
ベルリン国際農業映画祭金穂賞

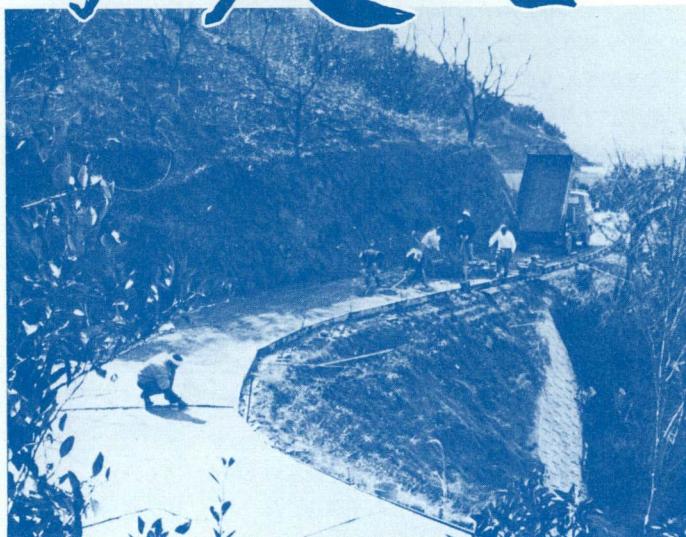
東京都教育映画コンクール金賞
日本紹介映画コンクール金賞
優秀映画鑑賞会推薦
農林省推薦
文部省選定



竜門の人びと

企画 貯蓄増強中央委員会
カラー 40分 ¥200,000

われわれの生活は
どうしたら変わるか
豊かにできるか
これは
明日をめざして進んだ
一農業集団の記録
その近代化の歩み



か い せ つ

昭和39年度の朝日農業賞を得た農業集団、和歌山県粉河町竜門地区が題材になっている。受賞理由に〈土地条件とくに農道整備を軸とする農業近代化の達成〉とあるように、道を中心に発展したその近代化の歩みを描いている。

竜門地区の近代化は、大正12年に組合員17人の共栄柑橘出荷組合が生れたことに始まる。中心になったのは、志磨重雄という25才の青年だった。彼は村に生れ、盛岡の高等農林学校を中退して家に帰ると、若者を集めて精神運動に熱中した。大正初期に起きた自由主義・人道主義運動の一つだった。彼は「人のためにつくせ。みんなでよくして行こう。」と村の若者たちに説き、学問と作業の一致を説いた。その実践運動として、当時のミカン商人の横暴に対して農家の共同出荷、さらに共同選挙も始めた

この共栄組合は、その頃の農民がまだ共同の何たるかも知らなかったのと、商人の切り崩しにあって、非常な苦勞をしたが、その苦闘の中から、いい青年がつつぎつぎ育っていた。

志磨さんらの薫陶をうけた上林さんが、昭和17年に、急峻な裏山のミカン畑にはじめて牛車を使える三米幅の新農道をひらいた。

ついで、戦後、上林さんより一と廻り若い植田さんが、農道の舗装、畑地かんがいなど、大胆な農業近代化の推進力になった。

彼らはいずれも20代で革新的な仕事をしている。比較的自由に、寝食を忘れて活動出来る年代である。やがて農家経営の重荷を背負って、そのかわり発言力も重味を加える30代、40代になると、若い人たちの事業を力づくで後押ししている。

この農業近代化の大きな魅力は、社会的に目ざめた精神運動であったことと、そして科学的なことであった。また、彼ら個人の仕事ではなく、いつも集団の活動だったことである。

彼らは、この映画の中では英雄たちのように見えるかも知れないが、世間的には名もない人びとである。しかし、そのすぐれた考え方、事業の発展的な積み重ね方は、見事というほかはない。

製作 桜映画社
配給

東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル
〒151 TEL.03(3320)6311 FAX.03(3320)7666

あ ら す じ

竜門地区はすべてミカン畑の中にある。濃緑の樹の間を縫う白く長いコンクリート農道が眼を射る。

この道にそもそも手をつけたといわれる上林さんを訪ねてみた。

昭和17年、上林さんが、戦地から帰ってみると、働いているのは女と老人ばかりで、このままではミカンはなっても採れない状態になると思った。そこで牛車の通れる三米幅の農道の建設を思い立った。

「もしあの当時に、志磨さん、窪さん、村長の金尾さんがおられなかったら、あの計画も遂行できなかったんじゃないか」と、上林さんは語る。

その志磨さんも窪さんも、今は70才、80才でまだ元気である。こういう先輩が、上林さんの前の時代にいて、この村のミカンの発展に大きな役割を果たしていた。

大正12年、当時25才の志磨さんが中心になって、ミカン商人の横暴に対抗してこの村にはじめて小さな出荷組合をつくった。上林さんも粉河中学を出ると組合員になって働いた。組合は何度も解散の危機に直面したが、若者の純粋な情熱にささえられて、この古い村にしっかりと根をおろした。

戦時中に画期的な農道建設を押し進めた青年時代の上林さんには、若い日の志磨さんや窪さんからうけついでた精神が流れていた。

こうして昭和18年の暮に、竜門村荒見地区の急峻なミカン山に、三千三百米の新農道がはじめて開通した。

牛車の威力には、反対した人たちも驚いた。人の肩でかつぎ降したのにくらべて、10倍の輸送力を発揮したからである。

戦争が終ると、兵隊から帰ってきた村の若者たちは植田さんを中心に柑橘研究会を作って、ミカン山の復興をはかった。

戦後のミカンの復興に、上林さんらがひらいた農道は大きな遺産として役立ったが、大雨にあうと流されて改修費がかかった。滑って危険だった。

昭和31年、将来の発展を見越して「荒見土地改良委員会」を作って、大胆な基盤整備計画に着手した。柑橘研究会につづいて、植田さんが推進力になった。

こんどは上林さんが、植田さんらの相談相手になり、力づよい後押しをしてくれた。

つづいて、昭和35年には、218ヘクタールに及ぶ全国ではじめて畑地かんがいに着手した。

この頃「農業の近代化も大切だが、生活はもっと大切ではないか」と、主婦たちが共通の悩みをもって集り「からたち会」という主婦のグループが生まれた。

昭和37年、荒見地区がモデルになって、竜門は農林省から農業構造改善事業のパイロット地区に指定され、基盤整備計画は全村にひろがった。

この大事業は、昭和41年に完成した。

農業の近代化は、村の生活に大きな変化をもたらした。

昭和37年と、5年後の昭和42年をくらべると、一戸当りの平均所得は二倍になった。

しかし、生活の近代化はこれからである。人間関係をもっと明るくしたい。また調子に乗りすぎたこの頃の生活はもっと地についたものにしたい、と心ある主婦たちは云う。

農業経営の面でも、新しい明日の課題を迎えている。品種の改良もその一つ。また、ミカンには近い将来予想される過剰生産の問題がある。これをどう乗り越えるか。

それぞれの農家はそれぞれに、明日の農業を目ざして動いている。

この映画を見て

鏡のような

映画評論家 登川直樹

農業とはこんなにも美しいものかと思いつく感心した。ここに働く人たちの姿にはおよそ、農民という言葉に古くからつきまとった、暗くみじめな響きが微塵もない。水田とちがって果樹園のせいかな、いやそんな単純なことではない。

農業とは、ここでは考えることだ。考えて働き、働いては考えた。それが今日の美しい農業になったのだという教訓を読みとることができる。してみると、これはひとり果樹園や農業に限ったことでなく、人間の生活全般にあてはまる問題だときづく。美しい農業を見ているうちに、自分のことを反省してしまう、これはそういう鏡のような映画である。

竜門の苦闘史

法政大学教授 大島清

私はかつてこの村を調査したことがあるので、画面の美しさは予期したところですが、スプリングラーの虹は、予想外の光景でした。しかし、画面の美しさより気に入ったのは、大正一昭和、50年の、3人の人間によって語られる歴史でした。3人ともよく竜門の苦闘史を現わしています。

ミカン運びの画面に聞える歌、ミカンの樹を伐る農民の手。そして道にこぼれる黄金色のオレンジ。

この映画が全国の都市と農村の働く人びとに見られることを望んでやみません。

製作・脚本	村山英治
演出	堀内甲
撮影	三枝弘夫
照明	松原省志郎
音楽	長沢勝俊
解説	川久保潔